



浜家連 ニュース9月号

第289号

2024年9月1日発行

発行人 特定非営利活動法人 横浜市精神障害者家族連合会

事務局 〒222-0035 横浜市港北区鳥山町 1752 番地

障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール3階

電話 045(548)4816・FAX 045(548)4836

URL <https://hamakaren.jp/>

健康福祉局へ要望書を提出し、懇談を行いました。

副理事長 安富英世

今年も横浜市健康福祉局との要望書提出及び懇談が、猛暑の中、8月5日(月)午前10時から市庁舎会議室で行われました。

健康福祉局側からは、君和田障害保健福祉部長をはじめ、課長、係長、課員等、計13名の方々が対応してくださいました。浜家連側からは、理事長、副理事長4名、常任理事2名、理事2名、会員3名、事務局長の同数が差し向かいに着座し、最初に井汲理事長から君和田部長への要望書提出セレモニーで始まりました。



まず医療費助成の拡充について、重度障害者(1級)の精神科入院費用への助成を要望しました。神奈川県から横浜市への助成補助率が3分の1から2分の1にすでに引き上げられましたが、市によれば、県の精神障害者への公費負担の考え方は、「通院に係るものに限定する」というものなので、市として無視はできず、真意を確かめるべく県との協議を継続するとのことでした。精神1級の入院費用に要する予算規模を質問したところ、政令市の相模原市での入院費用を横浜市に当てはめて試算すると、7~8億円とのことでした。なお、本制度が、身体・知的・精神の3障害の区別なく全国一律の制度が望ましいとの立場は、横浜市も神奈川県と同じと長年言い続けてきましたが、いかんせん、国として障害間ならびに地域間の差別を解消しようともせず、方針を明示していないのが現状です。

次に、精神2級以下の当事者の精神科以外の医療費について、現在3割負担となっていることに対して、申請ベースでの所得に応じた医療費軽減の検討を要望しました。これは、収入が少ない当事者の立場からの新たな制度創設の要望です。市側からは、高額療養費支給制度ではどうかという話もありましたが、「世帯主及び国保加入者全員が住民税非課税」世帯であっても、月額35,400円を上限とするもので、敷居が高すぎるように感じました。いずれにしろ、市側でも今後研究を進めるとのことでした。

「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築推進については、当事者の地域生活に広範に関わるものなので、話題が豊富に出ました。アウトリーチ事業は保土ヶ谷区の一部で行われているがその後進展せず、市内にも夜間対応のクリニックや相談もできる訪問看護ステーションなどが存在するとの話は出ましたが、行政として積極的に進めるとの話にはなっていないようでした。ただし、「にも包括」の協議の場への医療機関との連携不足については、市側でも認識しているとのことなので、今後何らかの方策を打ち出すことを期待します。また、「計画相談」については、相談員資格の研修を市も推進しているが、相談そのものの達成率は60%台で進んでおらず、他所の市町村と比べても低いとの認識を持っているとのこと。家族からは、当事者による「セルフプラン」で、本人任せで支援が届いていないのではないかと、との意見も出されました。また、相談支援体制については、福祉保健センター、生活支援センター、基幹相談センターと、横浜市は窓口が多くて広い反面、部門間での受け渡しの連携不足、責任部署の不明確さ等に課題があるのではとの意見も示されました。また一部の区では、ケアプラザが高齢者以外に精神を含めた障害者への対応を積極的に実施しているといったケースもあるとのこと。なお、グループホームの空室情報は、市全域で共有するようになっていて、各区から参照可で便利になっているとの最新情報を知らせてもらいました。

精神科病院の入院患者への人権擁護の徹底については、精神医療審査会の審査も含め、こころの健康相談センターの役割が大きいことを再認識しました。このセンターでは、電話相談、精神障害者保

健福祉手帳・自立支援医療・入院医療看護金の審査、市内28精神科病院に対する虐待防止・通報の指導等のほか、依存症や自殺予防対策を行うなど、横浜市において精神科医療の核となる部門のようです。

各区福祉保健センターのMSWの増員については、MSWが産休や家庭の事情等で欠員になった場合の補充について質問し、定年退職者の臨時雇用といった方法などの方策を話題にしましたが、結論は出ないままです。

福祉パスICカード化促進については、当事者の生の声を浜家連側から説明しましたが、本人の悩みと生きづらさが、少しでも健康福祉局側に伝わることを願いました。

浜家連の主な活動は、①市民メンタルヘルス講座、②家族による家族学習会、③ピア電話相談です。その中の「家族による家族学習会」は、精神疾患の治療・回復・対応の仕方などについて、正しい情報とともに、家族自身の体験に基づいた知識や知恵を共有しながら、家族同士の支えあいの場を提供し、すでに浜家連で約15年の実績があり、また受講した家族からの評価も高いことを説明しました。一方この間、学習会実行委員（家族）の高齢化が進み、諸物価の高騰も相まって、委員の人数を毎回5名から6名以上へ増やすために、家族学習会予算の3割増額をお願いしました。（家族学習会は、横浜市からの委託事業で、市の第4期障害者プランにも入っています。）

懇談会は、当初の予定時間を15分もオーバーし、11時45分に終わりました。浜家連の会員の参加もあり、また要望毎に課題と議論を集中するように進めたこともあって、活発な議論が行われたように思いました。参加された大勢の方々、本当にありがとうございました。

浜家連の動き



- ◆ 6月から行ってきました「要望書の提出及び懇談会」も8月5日の健康福祉局を最後に終了しました。我々の思いが少しでも届いて、政策に生かされることを願います。

令和7年度予算編成に対する日本維新の会横浜市会議員団宛要望書提出と懇談会について

みなみ会 加藤 貞子



去る7月11日（木）午前10時～11時市庁舎議会棟6階議員室にて、日本維新の会からは団長串田久子氏はじめ副団長2名、書記議員1名の計4名、浜家連からは三役5名と常任理事2名、中居事務局長の計8名で「要望書の提出及び懇談会」が行われました。

元市会議員の菅野副理事長のご紹介で今回初めて実施できたそうです。菅野さんと維新の会団長の他、議員さん方が親しく笑顔で談笑されている姿に、こちらも嬉しく心強く感じました。

先ず井汲理事長から「要望書に関する懇談会」を実施していただいたことに感謝のご挨拶があり、順次参加者の自己紹介の後、要望書にそって各副理事長からそれぞれ要望について、実例や現状を交えながら、詳しい説明を行いました。

和やかな雰囲気の中、あっという間に1時間が過ぎました。私たちの切なる要望が議員さん方のところに届くように願ってやみません。そして、これからも継続して声を出して伝えていくことが大切と感じました。

日本共産党神奈川県議会議員団への要望書提出及び懇談会 のぞみ 福井司臣

県庁新庁舎9階第7会議室に於いて7月25日13:30から14:30迄、標記要望書提出及び懇談会が行われました。本懇談会への出席者は、浜家連からは井汲理事長以下8名、日本共産党神奈川県議団からは大山団長以下3名でした。井汲理事長の新任挨拶の後、要望書



に基づいて当方の要望事項の説明が、各担当者から行われました。それに応えて、議員団からいろいろな質問等が出されました。主な質問内容は、地域包括ケアシステムや精神科特例に関する基礎的な質問、生活相談プランなどに関するものであり、当方が力説した精神障害者に対する(精神)医療の実態、医療機関

の患者側に対する費用なども含むサービスの貧弱さ、医療機関の利益優先姿勢(制度)などについての質問・説明は乏しいものでした。

筆者は何度かこのような懇談会に出席していますが、懇談会の相手(団体)がどこであれ、毎回、当方の期待を満足させるような本質的な回答は得られず、残念な思いをしています。当方の要望の実現が困難なのか、その原因は何なのか、本当に予算が不足しているのか、相手方に実現に対する強い意欲が不足しているのか、危機感が無いのか等不明です。このような懇談会が、馴れ合いとなり、形骸化しないことを期待しています。

当方の要望の提示方法に工夫が必要かもしれません。困っていることを単に事実として列挙し回答を求めるのではなく、それらの背後にあること、関連することなどの説明を行い、相手方にこれらに対する解釈を求めることも一つの方法かもしれません。

我々が最も関心のある精神医療に関して、次のような事実があります。日本医師会元会長の武見太郎氏は「精神医療は牧畜だ」と述べています。これは次のように解釈されます。まず、牧畜ですから牧畜する「モノ」が必要です。その「モノ」こそ「患者」です。精神医療にとって患者はヒツジやブタと同じ「モノ」なのです。これは武見太郎氏や精神医療の内情を知っている人びとの代弁なのです。そして餌が必要ですが、餌は精神薬に他なりません。そして牧場が必要ですが、それこそ精神病院であり患者の家そのものです。他のところへ行って貰っては困るのです。牧場ですからお金を儲ける必要があります。そのためにはどうすればいいかという、ヒツジならば毛を刈って繊維にしたり、ウシならば乳を精製して売ればよいのです。これは通院して薬をもらうことにより、精神科医や製薬会社が儲けている構図と同じです。そして、最後はどうなるのでしょうか？屠殺され肉に加工されて売られる……。つまり最後は精神医療によって殺されます。

これは非常に上手い比喩ですが、決して過剰な表現ではありません。それを日本医師会のドンが公式に述べたということに深い意義があるのです。

このように考えると、八王子市の滝山病院事件や新聞紙上を賑わしている精神医療に関する記事、さらには身内の当事者の現状が良く理解できますね。

つまりこのような背景と合わせて、我々の要望事項を説明するのも、懇談会における相手を本気にさせる方法の一つかも知れません。勿論、このような背景を知ることによって、要望を主張する我々の迫りも、倍増するのではないかと考えますが、如何でしょうか。

健康福祉局との令和7年度の予算要望に関わる懇談会に参加して

さかえ会 藤田みちる

市庁舎での懇談会に理事の皆さんと一緒に会員として参加いたしました。



要望書の15項目について浜家連より説明ののち局の担当の方々からの簡単な回答がありました。後日、書面で正式回答が来るのですが、対面でのやり取りがあることで内容の掘り下げができ、施策に反映されるのではないかと期待します。

精神障害者が地域で平穏に生活するにはどのような支援があればよいのか、家族は何を望んでいるのか、個々事情は違いますが直接話し合うことでお互いの理解が深まり、市の施策も実情に沿ったものになるとの思いを深めました。

まだまだ見えないものへの配慮は難しく、「見える化」していく難しさや施策に使われている用語の難しさもあるなとも感じました。その一つに「計画相談」があります。利用してよかったという参加者の話や用語の内容がわかりづらく利用しづらいという話に、介護でのケアマネと同じようなものであるとの説明や、市内のグループホーム空室情報提供、建築局で実施している居住支援や就労支援状況など横浜市で実施していることの紹介がありました。

今回の要望も、健康福祉局のみに関連することではないので、縦割りではなく各部局間でどのように私たちの願いが共有されて、施策に反映され予算化されるのか、注視していきたいなと思いました。



◆高森先生の家族 SST

「親が変われば子も変わる(仮題)」(「こころのげんき+ 7月号」に掲載予定の高森先生の記事)を先生が読み上げながらお話が進みました。あじさいの会 K、K

家族が子どもの話を聴くことは治療的役割なのです。まずいきなり自分の考えは言わないようにしましょう。例えば、子どもが「職場で掃除とか、契約以外のことをやらされたよ」と言ったとき、親が世間の常識を教えたくて「仕事とはそういうものだよ」と答えれば子は傷つき、暴力にまで発展します。親の意見はいくら優しく言ったとしても子どもの脳を荒らしてしまうのです。

親子の会話のパターンは赤ちゃんの頃からの積み重ねで、固定化しており、親は結論や自分の考えから言いがちです。しかし子どもは親に「自分の気持ちをわかってほしい」のです。それが子どもが親に一番望んでいる事なのです。

子どもをほめたり、感謝するのは実は楽なのです。それだけではなく、親は会話のパターンを変えましょう。自分の考えを言いそうになるのを我慢するために、子どもが何かを言って来たら「反復確認」です。「頭が痛い」「頭が痛いね」と、同じ言葉を繰り返すことで子どもは安心します。反復確認は脳にやさしい言葉なのです。それから共感です。「それはつらかったね」。この一連の会話の流れが子どもに寄り添うということです。子どもは安心がほしいのです。安心を感じられると子どもは変わっていきます。

後半、皆で車座になって「プラスワン(1)」というゲームをしました。反復確認の練習です。

- 例 ①自分「花の名前を言います」
②自分「あじさい、チューリップ、(2つ挙げる)プラスワンをお願いします」
③他人(思い付いたら挙手して)「バラ」
④自分「バラですね。(反復確認)ありがとうございます。」
⑤自分「(その人に向かって)次のリーダーをお願いします」
⑥プラスワンを答えた人が新しいお題を出してゲームを続ける。

新たなお題を考えると脳が状況変化に強くなります。自然に反復確認もできるようになります。

ゲームの後は2人一組になり、話す人、聴く人を決め、聴く人は反復確認をしながら相手の話を聴きました。会話が終わったら何%くらい反復確認ができたかを発表しました。50%くらいの方が多かったようです。普段から反復確認を意識してみようと思いました。

§ イベント情報 §

◆2024年度 第2回 市民メンタルヘルス講座◆

減薬という旅の彼方に
～学ぶことで薬を減らそう～

日時：2024年10月26日(土) 13:30~16:00

場所：横浜市健康福祉総合センター4階ホール

講師：小林 和人氏(精神科医)

特定医療法人山容会 山容病院 理事長・院長

入場無料 定員 300名(先着順)

Zoom 定員50名 事前申し込み必要

【編集後記】パリオリンピックは海外の大会ではこれまでにないメダル数を獲得し、多くの感動的な場面を目にしました。また、窮地に至った時の選手のメンタルの強さにも驚きました。

日本では、宮崎県で発生した大地震で南海トラフ大地震の注意発令、記録的猛暑、いくつもの台風の発生で大変なお盆となってしまいました。(事務局 中居)